

市内には、七十歳以上のお年寄りが二、七四六八、その内で九十歳以上の方、八三人を対象に高齢者番付表を作成しました。(九月五日調査)

また、百歳以上の長寿の方が三人おられます。敬老の日を前に、この三人を訪ねて、長寿の秘けつなどを尋ねました。三人を訪ねて感じたことは、三人共若い時は一生懸命に働き、美食におほれることなく摂生に努め、老いては慈しんでくれる人達に恵まれておられることでした。

### 家族みんなが やさしくしてくれる



岩本イチ真木さん 100歳

明治十八年五月一日現在の秋芳町嘉万で生まれる。十八歳で結婚、子供は二人。

岩本さんの家の周囲の田ん

### 夢中で働いて 気がついたら一〇一歳だった



大田ハツ恵さん 101歳

明治十七年九月一日現在の日置町炭床で生まれる。十八歳で結婚、子供は三人。

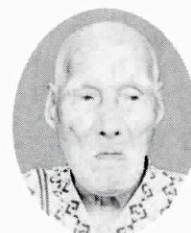
大田さんの部屋は南向きの清潔で明るい部屋でした。こへは、足を痛めて入院中だった病院を、昭和五十九年三月に退院して以来ということでした。

お会いして最初に感じたことは、赤ちゃんがそのまま年を取ったという感じのかわいなお婆あさんでした。顔の血色がとともよく、目も見え言葉も不自由なく昔のことを尋ねても正確に答えられてとても百一歳とは思われなかった。今までに一番楽しかったことを尋ねると、「楽しかったことは何もない、子供を育てるため、夢中で仕事をして、気がついたら、この年になっていた」との答えだった。十二歳の時、日露戦争で主人を失い、三人の子供を育てる

ため成り振りかまわず働いたという。長女は元気で、時々見舞に訪れる。その長女も、すでに八十歳を越えている。最後に、長生きの秘けつをおしえて欲しいと言うと、声を出して笑って、口をつぐみ首を横に振り、しばらくして「貧乏だったので、仕事仕事で、食べものは粗食を何でも食べた」と、つぶやくように話された。入苑する時はイヤイヤ言って、孫を困らせたが今では、入苑してよかったと思っているとのこと。別れる時、お元気で暮らして長生きをしてください、と言うと「あなたも長生きしてください」と言われたが、私にはそんな自信はなかった。

や、手は不自由はないのと。コトジさんの話では、今でも計算は確かだ家族がお金の計算を間違えると「どねーちゅうことじゃろうかい」と笑われるという。イチさんから、十八歳の年の正月に現在の秋芳町嘉万からの嫁入道中の話を聞いた。実家を出る時から仕事衣にわらざうりを履き、荒ヶ峠の山道を歩いて越しての花嫁道中。真木の宇治寄まで来て、ここで嫁入支度に替ると、きのうのこのように話される。嫁いでも機織りの糸を買うために何度足は鍛えて丈夫だった。チェ子さんの話では、去年カゼで入院した際に、ベットでの生活をしたため、それ以来足が弱くなった。九十八歳までは田のあぜ刈はイチさんの仕事だった、山へも行っていたとのこと。長生きの秘けつを尋ねたら「わたしは、酒もタバコもだめです。食べ物ばかり嫌なく食べる」と話された。最後に、一番うれしかったことは、と尋ねたら「新しい家に入ることが出来たことと家族みんながやさしくしてくれること」と答えられた。私も幸せな気持ちになって岩本さん宅をあとにした。

### 人から信用された ことがうれしい



竹野勘次郎さん 100歳

明治十八年八月五日現在の三隅町市で生まれる。二十一歳で結婚、子供は八人。

下郷区の竹野さんを訪ねた時、勘次郎さんは縁側でさつま芋の茎をむいておられた。目が弱くなったと聞いていたが細い芋の茎を一本づつ指先で折って、器用に皮をむかれるのには驚いた。耳も不自由しない程度に聞こえ、皮むきの手を休めることなく丁寧な言葉で話は進んだ。二十一歳で養子に來たが、生活は苦しく米は親方へ納めた残りのくず米だけを食べた。これではどうにもならないと、魚の行商をはじめた。行商先は現在の美祢市於福でした。夜半に自宅を出て、黄波戸の浜で早朝鮮魚を仕入れて於福を売って歩きました。当時は鉄道も自転車もなく、かごに入れて背負って、徒歩で大ヶ峠を越えたのです。昼までに於福に

着かないと商いにならず、雪の日の峠越は難儀だった。於福の人達には信用され「魚を買うなら勘さんの魚を買え」と言われるまでになった。この話をしながら「今でも於福の人達には感謝しています」と、手を合される。今までで一番うれしかったことはと尋ねると、「於福の人達に信用されて、六十六歳まで魚の行商が続けられたことです」と答えられた。長生きの秘けつは、麦めしを食べ好き嫌いなく何でも食べる。穏やかなお顔を見ていると、結婚式の席に飾られる掛軸の商砂の浦の翁の顔がほうふつとしました。帰るとき、お元気で長生きをしてくださいと言うと、私の手を取って、「ありがたうございました」と力強く握られた。柔らかく、温い手でした。

